別紙様式３

令和元年度　第２回　地域連携による活力ある高校づくり推進協議会　議事要旨

日　時	令和２年２月７日（金）　１５：５０～１６：５０
場　所	飛騨市文化交流センター　リハーサル室
出席者 （敬称略）	布俣　正也　　岐阜県議会議員 都竹　淳也　　飛騨市長 沖畑　康子　　飛騨市教育委員会教育長 向川原眞郷　　古川中学校長 渡邉　正憲　　株式会社飛騨ダイカスト代表取締役 岡山　正喜　　アルプス薬品工業（株）総務担当取締役 川上　佳洋　　宇宙まるごと創生塾飛騨アカデミー理事長 関口　祐太　　株式会社Ｅｄｏ 石原　典子　　民生委員・主任児童委員 坂本　頼彦　　吉城高校育友会長 （学校関係者） 日江井孝浩　　吉城高等学校　校長 大野　貴司　　同　教頭 日野　利明　　同　事務長 小原　　誠　　同　教務主任 小澤　　耕　　同　進路指導主事 寺門　隆治　　同　理数科主任 （県教育委員会） 石原　康秀　　教育総務課課長補佐 日比　　学　　教育総務課管理主事
議事概要	１　開会挨拶　岐阜県議会議員　布俣　正也　様 　ＹＣＫ報告会及びその活動は、数を重ねるごとに進歩、進化している。生徒の自主性・主体性については、まだまだ発展途上で可能性を秘めている。これからも、コミュニケーション能力や自己肯定感を大切にした上で、批判的思考も加えるなど創意工夫して成長してほしい。吉城高校、飛騨神岡高校ともに「こんな山の高校がすごいことをやっている」ということが、岐阜県内の色々な高校に影響を及ぼしていくことを期待している。 ２　学校からの報告、説明 資料１　令和元年度 地域連携による活力ある高校づくり推進事業 実施報告 資料２　平成 29 年度から３か年の取組による成果と課題 資料３　地域との協働による高等学校教育改革推進事業 資料４　令和元年度 自己評価、学校関係者評価 ＜参考資料＞　①学校経営計画（高等学校版マニフェスト） ②項目別数値実績と目標 ③生徒、保護者アンケート

	３　協議 ・資料１の事業報告におけるＹＣＫプロジェクト分野の「授業」と「総合」の違いは何か。 ⇒授業は、学校設定科目「地域課題探究」や「英語会話」等で行ったもの、総合は「総合的な探究（学習）の時間」で行ったものとして記している。 ・資料３の学校設定科目「地域課題探究」と「地域ＰＢＬ」の違いは何か。 ⇒「地域課題探究」は、１年次・２年次・３年次の選択科目として設置、「地域ＰＢＬ」は、２年次の「総合的な探究の時間」１単位を「地域ＰＢＬ」に代替えし、普通科全員が三つのテーマ（①飛騨市（行政）が抱える課題、②身近な地域課題、③地域イベントの企画）から選択し、探究学習を行うことを考えている。更に３年生総合コースでは「地域ＰＢＬ発展」として、自分の将来の職業をテーマに探究させる予定である。なお、理数科は課題研究を実施するため地域ＰＢＬは設置しないが、地域課題探究は理数科の生徒も選択できるようにしている。 ・資料４の教科指導における評価の視点「授業は改善されたか」の改善は、教員それぞれの視点からなのか、それとも学校としてのテーマがあるのか。 ⇒今年度は、ＩＣＴ機器の活用のアンケート、生徒の授業アンケート、教員の公開授業を対象とし、評価指標として行った。 ・①資料４の学校経営「飛騨市学園構想への参画」について具体的に教えて欲しい。 ・②資料４の生徒指導「いじめ対策」について調査をどの程度行ったか。その後の対応はどのようにしているか。 ⇒①保・小・中・高・特でどのようにカリキュラムを行っていくのか検討中。構想として、小学校から中学までに探究的な心を育て、高校ではどんどん外に出て活動できるように、同じ意識の下連携して行けるように進めている。 ⇒②アンテナを高くするよう心がけている。生徒に対しては年３回のアンケートと懇談による確認、保護者に対してはすぐメールを利用し意見を集約している。事案が分かった（発生した）場合は、関係生徒に対してきちんと対応するとともに、その周囲の生徒からも必ず話を聞きくなど組織として取り組んでいる。 ・いじめはデリケートな問題であり、何かがあった後にマスコミや地域からいろんなことが出てくる。日頃から取扱いについて学校全体での共通理解の下、教員が一人で抱え込むことがないようにしてほしい。 ・台湾研修について、今後は台湾の高校生と交流、高校との姉妹提携など発展的に交流を考えて欲しい。 ⇒飛騨神岡高校の校長とも、前向きに考えている。 ・吉城高校のＹＣＫが地域の中で存在感を発揮していることを目の当たりにさせていただいた。その基盤となるのが義務教育である。飛騨市学園構想会議では「お米」の例で見られるように、一貫したカリキュラムを検討していただいている。中学校では、それに向け、自分から課題を見つけて解決するような授業を目指し、どの教科でもエネルギーを使っているところである。学習においてはインプットがないと基盤ができないが、学びの主体である子供たちがアウトプットする作業が主体性の育成において重要であると考え、その取組を少しずつ進めている。また、大正大学の浦崎先生の言葉に「有用感を伴う自己肯定感を持たせる学校生活を送らせなければならない」といったことがあり、そういう学校生活、授業でないといけないと思っている。小学校、中学校においてはそのような思いの中で教育活動を進めており、組織的に高等学校につながっていくことを望んでいる。

	・ＹＣＫの取組に、昨年より積み上げがあってよかった。途中うまくいかなかったこともあったようだが、結果でなくプロセスが大切である。次年度新しい科目を増やし、習熟度別や、少人数授業などのシステムが工夫されていて、労力のいることを学校全体で取組をされていて、とっても頑張っているなということを感じる。 ・飛騨市学園構想においては「幸福な人生」「持続可能な未来の作り手」を目指し、どのような力を身に付けさせる必要があるかを地域とともに考えている。どんな力を、どのようにして積み上げていくかについては、高校だけでは考えられないため、どの段階でどうしていくのかを話し合ってきた。今年度中にはリーフレットを配布する予定であり、地域との協働体制を構築していきたい。 ・総合的な探究の時間等で行われている探究的な学びと教科の授業との乖離を感じる。ＰＢＬは教科学習の中でも重要であり、ＩＣＴについても使うことが目的ではない。（与えられる知識を黙々とノートに記述する場面を見ることが多いが、）「主体的、対話的で深い学び」の目標が全教職員で共有されることが大切。目指している授業が行われているかを検証するには、生徒へのアンケートの問いを検証する必要がある。システムだけでなく、授業の在り方を問うものに変える必要があると考える。 ⇒本校で開催したＩＣＴの公開授業のことを含めての御意見だと思う。ＩＣＴの使い方だけを追っていっただけのようなものがあり「探究」が見られなかった。ＩＣＴありきになってしまい、主体性や対話的な取組が見られない授業ではいけないと強く感じている。 ・小中も同じ状況である。ともに研究ができればよいと思う。 ・ＹＣＫが、数年で急激に進化してきた。着実に成果に結びついている。 生徒は毎年変わっていくため、取組が目指すところとどれだけヒットしているかが成果といえる。すべての内容に共通していること（「人との関わり」「企画・挑戦」「仲間と一緒にやる」「話したり、聞いたりする」）があり、その後の「反省」が確実に次へのエネルギーになっている。ＹＣＫは以前から評価しているが、更に「質」や「掘り下げ方」が格段によくなっており、この流れは間違っていない。どんどん進めてほしい。高く評価したい。 ・文科省事業への申請は、ぜひ通ってほしい。この中で教科を通して全生徒が関わることが、次の大きなステップである。市としては「地域ＰＢＬ」の「Ｐ」の部分の捉え方の動議付けを何らかの形で関わっていきたい。市役所は日々「Ｐ」に向き合っている。生徒が課題を見つける手法・仕組みが、ＹＣＫの発展系に結びついていく一つのテーマとなる。生徒たちが自分で自分の課題を見つける手法・仕組みを研究したい。教科の授業との関連性もそこにあると思える。例えば、数学の中にも課題の発見がある。社会の授業はその宝庫。国語の文学の中にも地域課題の発見に結びつくものがあると思う。教科の中に「Ｐ」のあらゆるヒントがあるのではないかと思われる。 ⇒「教科等横断的な取組」として、家庭科をハブとして地域課題と各教科を関連付け、更にどのような資質・能力が各教科で身に付けられるかというデータを取り、教科横断的に育成を図っていきたい。 ・ＹＣＫが活発になり生徒参加数も増えているが、ぜひ生徒に次のようなデータ（アンケート）を採って、生徒の本音を聞いてほしい。①ＹＣＫに参加して「楽しい」「楽しくない」か。②吉城高校は「楽しい」「楽しくない」か。やらされるのではなく楽しいと感じてやることは非常に重要である。楽しい取組であれば更に発展・進化する。

	・多くの総合学科で取り入れられている「産業社会と人間」の内容は、ＹＣＫ活動に似ていると思う。カリキュラムに取り入れることを検討してはどうか。 ・自分たちも地域愛が目覚めた感じである。企業として、優秀な人材が育てられても、よそにいって帰ってこない。経営者懇談会でも問題としている。外を見て、力を付けて、戻って来て、地域を活性化させてほしい。その部分も含めての取組をお願いしたい。中学校の企業見学では、アポ取りから礼状まで自分たちでやっており、ＹＣＫの活動につなげられている。名刺も手書きの名刺で嬉しかった。 ・課題を見つけるためのデータをどこから仕入れているのか疑問に感じた。社会の現状のデータを提示する工夫において、私たち周囲の協力が必要なのではと感じた。ＹＣＫ報告会での講師からの質問に対して、正しい答え、正解を出すことが目的ではなく、自分の研究したことがどうだったか、自分の中でしっかりかみ砕いて理解するが大事。「なにか、いいことを言わなければ」ではなく、「自分はこう思っている」という熱いものが出せるようになればよいと思った。 ・ＹＣＫの発表内容が、数段高くなってきていると感じた。教授に質問されたとき、生徒が自分の言葉で返せなかったことは、今後、吉城の生徒は外に対して話す力を付けなければいけないと感じた。小学校、中学校の学校便りに「来年度はこのようなことを学校でします」「このような生徒を目指します」というような内容が秋以降増えた気がする。それが市民に広がり、親の気持ちも変わっていくことを願っている。それが地域における小学生、中学生の育て方に広がり、ゆくゆくは高校生の方にも広がっていくと期待している。なお、先ほど質問があった「いじめ対策」については、いじめ防止対策検討会議に委員として出席しており、組織的な対策がなされ、いじめの現状、対応状況が報告されていることを確認している。 ・ＹＣＫ報告会の発表、プレゼンとかすごくうまくて、すぐにでもうちの会社に入って欲しい。飛騨市学園構想についてあやふやな部分があったが、今回の会議でよく理解できた。ＹＣＫの目標で「たくましく生きる力を育成する」があるが、人生の中では壁にぶち当たったりすることがあるので、ＹＣＫでも失敗の事例があってもよい。ＹＣＫを通して失敗に対応できる力を身に付けた、たくましい人間に育ってほしいと思う。また、進路を決める上では、夢だけでなく経済面等の現実的な部分も考え進路選択をしてほしい。 ・３年前から吉城高校に関わらせてもらっている。少しずつ関わりを減らすようになっている中で、今年度は、社会人・企業人としての目で報告会を見させていただいた。印象に残っているのは、祭ボランティアの発表後、台組総代さんが「本当にありがとう」と言われたこと。本当に困っている人から感謝の言葉をもらう経験は大切である。現在私は、課題から仕事をつくり、事業としてそれを持続的に回すことを始めている。その原動力は「感謝」であり、生徒においても、今から多様な人々と関わりながら感謝される体験を積んでいくことはとても意味あることである。一方、ある会議で「果たして大人が地域の課題に生徒を向き合わせて、やらせているみたいなことでいいのかどうか。それって、本当に主体的なのか」という意見が出た。ある地域の探究学習の取組では「自分の好きから始めたれ」「自分が興味・関心があることからやらせればいいじゃないか」ということになった。１６個のプロジェクトが出てきたが、結果、自分が生まれた地域で、自分らしさを生かしたプロジェクトが出され、入り口は自分であったが、育った環境の中で役立ちたいと思う感覚があり、自分と社会がつながったプロジェクトが結果的に出てきたのではないかと思う。飛騨市学園構想においても、保小中高を通して地域の色々な人と関わりながら「感謝」「感謝される喜び」を積み上げ

	探究学習を進める中で、ＰＢＬによる地域での課題解決を、学校単位ではなくコミュニティー単位でどのようにして実現していくのかといった課題を構想会議の大人が探究している。学園構想により学校間の協力体制は整ってきているため、今後は、企業との接点をどのように構築していくのかを自分自身の課題としている。 ・ＹＣＫ報告会に初めて参加したが、とてもすばらしい内容であった。最初に生徒からＹＣＫの目的で「これからの社会を生き抜く力（考える力・主体性・協調性）を身に付ける」という言葉があり、生徒が理解のうえ実施していると感じた。この活動を継続するためには、地域の方の協力が必要であることから、今後も吉城高校への御協力をお願いしたい。